

ゲーマーが異世界魂転して
ブルブル人生に
コンテナコンテナするぞです

VOLUME

1

おねショタ好き推奨

etose

illust: 'J'you@涼

試し読み版

CONTENTS

プロローグ	005
第一話 幼少期	017
第二話 少年とおじーさん	021
第三話 少年とお母さん	025
第四話 少年と泥酔お母さん	035
第五話 少年と新生活	046
第六話 少年とお姉さんたち	065
第七話 少年と工ドウ	078
閑話 工ドウ	089
第八話 少年と発情工ドウ	102
第九話 少年とお姉さんたち2	112
第十話 少年とホリーと攻めの工ドウ	135
第十一話 少年といつもと違う朝	143
第十二話 少年とお姉さんたち3	150
第十三話 少年と新学期	161
第十四話 少年と性の宴	185
第十五話 少年と野外演習	211
第十六話 少年と山賊	223
第十七話 少年と傷	233
第十八話 少年と入院生活	251
第十九話 少年と帰ってきた日常	263
閑話 天界のとある日	272
第二十話 少年と性の宴・改	275
第二十一話 少年とお宅訪問	292
第二十二話 少年とお母さんたち	307
第二十三話 少年とホリー一家	317
第二十四話 少年と'JJ'一家の絆	335
第二十五話 少年と独占欲	357
第二十六話 少年と遺跡迷宮	385
第二十七話 少年とゴースト	394
第二十八話 少年と妹	406
第二十九話 少年と家族	418
閑話 淫と日常	427

(書き下ろし)



The gamers to reincarnate!

プロローグ

敵兵の仲間をかき集める叫び声が、階下から響いてくる。建物に響く足音は数えきれない。

「……畜生め！」

今いる場所は、巨大武器製造工場の屋上。屋上へと続くルートは、階段一つしかない。

そのドアに向けて、わずか三人の男と一人の女がドットサイトを覗き込み、駆け上がってくる敵兵を待ち構えている。

敵兵の声が狙う先から聞こえてくる。

勢い任せにドアが蹴破られ、黒い影が飛び出してきた。

見逃すことなく心臓、頭を狙いめがけバンバンッと手早く、撃ち抜く。

「——があッ！」

短い悲鳴をあげ、脳漿をぶち撒けて敵兵は崩れ落ちる。

勢い任せに出てこられては、たまったものではない。

「牽制射撃！」

怒号を張りあげる。

マーティンが操るM60軽機関銃が開け放たれたドアに向かつて、膨大な量の銃弾を撃ち込んでいく。

赤い曳光弾の束と立ち昇る土煙が、事の凄まじさを物語っている。

数秒後、マーティンから「リロード！」と大きな声が響いた。

手に持っているM4で「ババツ、ババツ」と、短くバースト射撃で牽制を引き継ぐ。

ここでどれだけ相手を食い止められるかが重要だ。

「レスター！ プランBからプランFへ移行！ 脱出の用意だ！ アンカーを打ち込め！」

建物内部の突破は難しいと判断。大胆に身を晒すことになる直接の脱出を選んだ。

外の壁に向かつて刺のついたワイヤーが突き刺さる。すぐさま、レスターの「完了！」という声が聞こえた。

視線を階段から外さぬまま、「行け行け行け!!」と

指示し、手榴弾を階段に向けて投げ込んだ。

炸裂するまでの時間が空き、ドガンッ！と大きな音が立つ。

ワイヤーにフックをかけ、近い者から「シューッ！」と音を立て、一人、また一人と滑空して降りていく。

段々と後退し、自分もアンカーが仕掛けられているポイントまで向かった。

次に、唯一の女性兵であるソフィアがアンカーにフックをかけ、飛び降りようとする。だが、見計らっていたかのように工場の一角が爆音と共に大爆発を起こして、辺り一帯を大きく揺らした。

壁に引っかかっていた刺が衝撃で抜け落ち、ワイヤーが使えなくなってしまった。

屋上から無事飛び降りられた二人に向かって「脱出地点へ移動しろ」と、指示をする。

「こうなっては仕方がない……：眼前の敵を蹴散らして正面から脱出する」

ソフィアは頭を縦に一振り。
「俺が先行する。背中には任せた！」

注意しながら階段の様子を窺うと、炸裂した手榴弾の破片をくらい、敵兵は木っ端微塵になっていた。

階下へ銃口を向け、死角を確認しつつ前進していく。たくさんの武器がラインで流れている一室に入ると

「時は来た！」と、ばかりにあらゆる場所から敵が一斉に飛び出し、猛烈な射撃を仕掛けてくる。

急いで体を遮蔽物へと隠し、銃だけを音のするほうに向けてトリガーを引いていく。

……うめき声があがった。弾が当たったらしい。頭を素早く出し、前方の様子を確認する。近距離の銃撃戦に相手も体全体を隠し、銃だけを覗かせて適当に撃ち続けている。

上半身を遮蔽物からせり出し、隠しきれない体の一部をめぐり、撃ち抜いていく。

完全に隠れている敵には牽制射撃を与えつつ、体が見える位置に移動し撃ち抜いた。

断末魔をあげて敵兵は倒れていく。辺り一面血の海だ。血で染まった地面を気にせず踏みしめると、くつきりとブーツの跡が血の海に残った。

「俺が先行する。背中には任せた！」

どうにかすべての敵を倒しきり、一階へと駆け下りる。

ようやく外へと繋がる扉が見えた。

問題はここだ。長方形に大きな空間が広がっている。体を隠せる程度の石柱が等間隔に両サイドに立ち並んでいる。

それが入り口まで続いているのだ。他に遮蔽物がない。俺が右、ソフィアが左の石柱に体を隠し、蛇行しながら前進していく。

真中まで到達すると、外へと繋がる扉が突然開かれ、そこから大量の敵が飛び込んでくる。その数「21」。

開かれた扉の音に気づき、ソフィアは手に持っているアサルトライフルで狙い撃つ。だが、大量の敵兵を送り込んできた車両の荷台には、固定された重機関銃が備え付けられていた。

その銃口の迫力に、目を見開いたソフィアは、瞬時に射撃を取りやめ、体を石柱に隠した。

——ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！

重機関銃の弾丸は、大きな音を立てて石柱をがりと削り、大穴をあけていく。

扉の中に入り込んできた敵兵も、体を隠すことなくソフィアめがけて牽制射撃をし続けている。

ソフィアは恐怖のあまり銃から手を放し、耳を手でふさいで蹲すくまってしまっている。

（——このままではソフィアがやられてしまう！）

大きく深呼吸をして、体を敵の眼前に晒す。

世界の動きがゆっくりゆっくりと、スローモーションになつていく……。

大腿開きで荷台から重機関銃をぶっぱなしてくる奴の頭めがけて一発。

その銃撃音に気づき、近くにいる敵兵が、だんだんと俺のほうに向いてくる。

舐めるように銃をスライドさせ、相手より先に「バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！」と、フルオートで撃ち倒していく。

（……18……19……20!!……あと一人ッ！）

スローモーションになつていた世界がまた加速する。

「——くそっ!! あと一人っ!!!」

奥にいる敵ほど最後までこちらを気にせずソフィアを撃ち続けていた。

最後の敵に残りすべての弾を撃ち込むと、空間は静寂に包まれる。

穴だらけになった敵兵は、血を吐き出しながら崩れ落ちた。

小さく震えているソフィアに急いで近寄る。

「大丈夫か……!?!」

耳を手でふさぎ、しゃがみこんでいたソフィアは、泣きはらした顔をあげ、戦闘が終わったことに今さら気づく。

顔に笑みが溢れるが、唐突に口から吐血してしまう

……。

被弾してしまっていた。脇腹に赤黒く血が滲んでいる……。

ソフィアの体からだんだんと体温が抜け落ちてゆく……。

応急手当を試みるが、血は止めどなく溢れる……。

そして、俺の頬に手を添えて、最後は静かに息を引き取ってしまった……。

涙が溢れて止まらない……。抱きしめたまま動けなくなってしまう……。

(……もう少し……あともう少しだったのに……っ!!)

悔やみきれない気持ちを押し殺し、冷たくなってしまったソフィアを抱き抱え、脱出地点へ向けて足取り重く歩きます……。

*

「くそおろろ!!! あと一人だったのにいい!!!」
持っていたコントローラーをベッドに向けて叩きつける。

その男の外見は「趣味はボディビルディングです!」と、言われても納得してしまうくらいの筋肉を、白のタンクトップで惜しみなく晒している。今年で24になる。平日は仕事終わりにジムに通い、休みの日はどっ

ぶりとゲームやプラモ制作をしている。肌は健康的な小麦色。髪は短くさっぱりとしている。体に似合わず、細かい作業を得意としており、室内は戦艦や航空機、戦車のプラモデルが綺麗に飾られている。

「なんでだよおお!! 威力も高く弾数も多いから使い続けたのいい……っ!!」

男がやっていたのは、発売から売り切れが続いている『グラストヘイム』と、呼ばれているFPSゲームである。日本のみで販売されており、ディスクのみの販売である。前情報もなく、ふいに立ち寄ったゲーム屋で運良く手に入れ、なんとなしに始めたところ、すべての武器、すべてのクエスト、すべてのストーリーを網羅するほどやり込んでいたのである。

子供の頃にヒロインであるソフィアと出会い、ある時期に離れ離れになってしまい、軍学校で再会。お互い気づかずに犬猿の仲とまで言われるほど、詳しい話し合う。そのまま軍に進み、偶然に同じ部隊配属、同僚として戦場で支え合う。小隊の仲間も明るく面白い。気持ちがいい上官に慕ってくれる部下。それにおっぱいの大

きいオペ子との小粋なトーク。恋に友情に熱い戦闘、日本人が好きそうなモノが全部入っていた。

(最後の敵が腹違いの兄弟つてもグツときたなあ……)

しかし、選択肢の組み合わせをどれほど検証しても、途中の一ルートだけが開放されない。どう考えてもソフィアの最後のシーンである。

出てくる敵は『21』。使えるメイン武器は順に、パランスの良いアサルトライフル。弾数が多く、取り回しもしやすいが、威力に欠けるサブマシンガン。弾数・威力共に高いが、取り回しが利かない軽機関銃。それに、クリア特典の癖の強い銃たち。あれこれ使い、何度も何度も繰り返しした。

サブマシンガンで試してみたところ、近場の敵は即座に倒せるのだが、奥にいる敵につれ、倒すまでの弾数が必要になり、どうしても『18人』くらいでスロームーションが解けてしまう。軽機関銃は距離も気にせず打ち倒せるのだが、ブレが激しくとても狙いづらい。最高でも『16人』だった。そして……最後にアサルト

ライフフルで「20人」。あと一人の壁が越えられない。

クリア特典の武器は論外だ。貫通力の高い狙撃銃や、着弾すると炸裂する特殊銃、それに狙う気さえ起きない対戦車砲である。どう考えてもまとまってくれなきや21人なんて倒せない。完全に手詰まり。

「もうこうなりやネットでも検索するかな……。これだけはしたくなかったが……」

自力でクリアを目指していたので、心底悔やみながらもネットで検索してみるが……。一向に情報が出てこない。

雑談スレッドを覗いてみるが、そこにも特に載っていない。既に全部試したようなことしか載っていないかった。

スレッドの中にて「チート使えばできるんじゃないかね?」と、いう人が検証をしたらしい。しかしチートでエィムを合わせても、跳ね上がっている状態で次の弾を撃つとまっすぐに飛ばず、ブレ幅がある状態が続いてしまうらしい。要は運ゲーである。だったら跳ね上がり方が収まるまでに次を狙い、戻ったら撃てばイイという

ことなのだが、落ちてから撃つた所、そもそもスローモーションが21人目寸前で切れたらしい。だからこれは不可避の演出だろうと結論づけられていた。

続いて「強引に開けちゃえよ」と、いうレスには、画像は他に入っておらず「このルートは本当は存在してなくて、制作会社のミスじゃないか?」と、書かれていた。

頭を抱え込んでしまう。

「コンプできないじゃないか! 作った奴、頭おかしーだろ!!」

ディスクケース裏面の販売元や制作会社を探したが、それらしい物は記載されていないかった。

「くそぉ〜!!!」

ケースを床に叩きつけるとパカッと、外側に向かって割れた。

パッケージには、グラストヘイムと書かれた文字の下に、アサルトライフルを構えている兵士が描かれている。その兵士の右腿にはホルダーに括りつけられたハンドガンがついている。

このゲームはヘッドショットボーナスがついており、全距離一撃死になる。しかし、連続で飛び跳ねる銃口で、器用に頭だけを狙って撃つなんてできるはずがない。

ハンドガンも武器選択候補の一つなのだが、そもそも弾数が足らず、よほど近距離じゃないと倒しきれない。序盤で毎回他の武器と交換してしまっていた。

「はあ、なんかないかなあ〜……見落とし……」

武器のアタツチメントを見回す。

消音器、減音器、ブレ防止の補助グリップに、ドット

トサイト類とレーザーサイト……全部出ている。

「全部の組み合わせを試したら何年かかるんだって話だよ……」

パッケージをボーッと見ていると、うつらうつらとしてきた。

「……ああ……寝よ」

気持ちの良い気分に関く、小さなポソポソとした声。

「ハンドガンじゃよ……ハンドガン。……それを一丁

だけで使え」

（……あ？ ……ハンドガンがなによ……???)

「ハンドガンじゃってば……!! いいから起きてはよ
プレイせよ!!」

雲の上で寝ているかのような気分だったのに、おでこに強い衝撃をくらう。

「——いてっ!!!」

痛みが走った部分を擦りながら起き上がると、宇宙戦艦が無残に転がっていた。

甲板部分に亀裂が走っている。

「——や〇とおおとおおお!!??!!?!!」

棚に固定してたはずの戦艦が空から降ってきた。

轟沈した戦艦に打ちひしがれていると、テレビにゲーム画面が映されていた。

「……あれ? つけたままだったっけ?」

ポーズボタンを解除すると、ゲーム世界が動き出す。そのシーンはソフィアが石柱に隠れ、重機関銃に撃たれる寸前だ。

体を投げ出し、世界がゆつくりとなりだした。

構えた武器は「ハンドガン」それに「補助グリップ」と「消音器」がついている。

「——おいおいおいおい！　こんなアタッチメントつけた覚えねーぞ!!　頭狙わなきや倒せねーじゃねえか!!」

射撃時に抑制された発砲音が鳴り、重機関銃を撃っていた敵の額に小さな穴があく。

小さな音に敵の反応は鈍く、その場からあまり頭がブレない。

動かない標的はただの的だ。近場の敵から頭めがけて撃ち抜いていく。

(……………1……………2……………3……………4……………!)

「……なんだこれ!!　まったく跳ね上がらないし、全然ブレねえ!!」

遠目の敵もスムーズに頭を捉える。

(18……………19……………!!!)

「——おおお!!　これはすげえ、20!!!　……でも弾切れた」

ハンドガンのスライドは後ろに引かれ、弾切れを示

していた。

「やっぱりだめじゃねえか……」

律儀に「リロード!」と、ゆつくりと声を出した主人公は、左手でグリップの中にあるマガジンの排出を補助する。

その手の中には、既に別マガジンが人差し指と中指で支えられていた。

スローに出てくるマガジンを中指と薬指で引き抜き、満タンのマガジンに一瞬で入れ替えた。

新しいマガジンの挿入に、後ろに引かれていたスライドは弾を捉え、発射可能の状態に戻る。

既に撃鉄は降ろされており、銃口は敵を捉えている。

小さな「パスッ」とした音と共に「うあっ!」と、小さくゆつくりとした口調で敵は絶命した。

倒れたと同時に世界は動きだす。

「た、倒せた……」

あまりのあっけなさにポカンとしてしまう。

「——つてかなんだあの早さ!　あんなに早いリロード見たことねえよ!」

ゲーム画面を凝視する。

「……メインウエポン……なし？ ハンドガンだけで……？ 武器の選択にその発想はなかった……。ていうかこれだけでここ抜けようなんて思う奴いないだろう……」

波のように押し寄せる敵地でハンドガン一丁でうろつく馬鹿はいない。しかしそれが唯一の正解だったようだ。

試しに軽く撃つてリロードをしてみると、それはもう早業だった。手品だった。神業だった。

「スローであれだけの速度……通常状態ならそりゃ見えないわ……」

騙された気分だと、思いながらソフィアに近づくと。

震えているソフィアに声をかけると、泣き顔のまま抱きついてきた。どこも撃たれていないようだ。

「おお……進んだ!! 進んだぞ!!」

クリアの喜びに舞い上がり「ヤッター!」と、大きく手をあげた拍子に、棚へと手がぶつかり一／二〇〇サイズの戦艦大和（推定約五キログラム）が、空から

降ってきた。どうやらこれも留め具が外れていたようだ。

頭に直撃した。

よろけた際、ゲームパッケージを踏み滑り、ベッドの取っ手に後頭部を打ちつけたのだった。

*

「おお、勇者よ……! 死んでしまうとは情けない……!」

白い服を着ている、白いもさもさ髭を蓄えた神様っぽいコスをしたじーさんが、俺に向かって聞き知った台詞を贈ってきた。

「勇者っていうか、もうウマシカじゃな。ウマシカすぎて腹が痛いわ! なんじゃあの死に様は、草食系か!」

(……よくわからないことを……!!)

神様っぽいくせにとても辛辣である。しかし、ぐうの音もでない。

「お前さんほど自分の力だけでプレイしてる奴がおらんかったから、ワシ自ら出張って攻略を教えたのに……。あの先にあるソフィアとのラブラブ生活が一番の売りじゃったのに！」

（けっこうなご高齢に思えるじーさんが、ラブラブだと……?? 天空すぎて寒気がするぜ……!! しかし、なんであのルートの先を知ってるんだ……?）

「まあ、死んじまったもんはしょうがない。特に現世に思い残したこともないじゃろ。輪廻転生してクソして寝ろ！」

（……こいつ絶対神様じゃねえーわ!! こんな神様許せねーわ!!!）

「わっはっは！ そう睨むな……冗談じゃよ。まあ、ワシも基本暇しとるからな。せつかく死んだんじゃ、ちよつと付き合え」

そう言う「ポイツ！」と、コントローラーを投げてきた。

手に取ろうとするが、コントローラーは手を透けて雲に「ボンボン」と、跳ね落ちてしまった。

「ああ、忘れとった。霊体のままじゃったな。……ほいつ！」

じーさんが手を振りかざすと、薄透明だった体に色がついた。

「——ふう、やっと喋れるみたいだね」

「はっはっは！ 忘れとったわい！ 歳取るところいうところが嫌じゃのまったく……」

落ちているコントローラーを拾い、じーさんの隣へ移動する。

目の前の雲に四角い穴があいている。そこには対戦格闘ゲームの名作『路上喧騒』が映し出されていた。

「これもじーさんが作ったのか……? 凄^凄えーな」

これまでの経緯から、すべてを理解しているつもりだ。

「——いんや? これは池〇のビツ〇カ〇ラで特売してたから買ってきた」

（……もはやなにも言えねえ……）

二人そろって無言でゲームを進める。

「なあ、じーさん。俺は……死んだんだよな？」

どうしても確認しなかった。言われることは決まっているだろうが、聞かないわけにはいかなかった。

「そうじゃな、打ちどころが悪かったんじやろうな。それと……発見が遅かったようじゃ」

終わりの間際は思っていた通りだった。

「……そっか」

また無言でコントローラーを操作する。

「しかし、誰にも知られていなかったシナリオを知っていたということは、『グラストヘイム』はじーさんが作ったのか？」

「ああ、あれはワシが全部作ったんじや」

「凄え楽しかったよ！ 正直買ったときはB級もんを馬鹿にしてやろうと思つて手に取つただけだな！」

「わっはっは！ 正直パッケージのデザインが一番苦勞したわい。ワシもあんな絵のパッケージが売られてたら、鼻で笑うな」

「ひでーな！ 自分で作った作品だろうに……。ふふつ、でもソフィアはかわいかったぜ！ 銀色の短いショートヘアーに、猫みたいな目！ 胸はあんまでかく

なかつたけど、スレンダーだし、なによりクーデレな性格が良かったぜ！」

「ワシのオススメはオペ子なんじやが、あの子も良かったじやろ？ 顔だけでいいのに、わざわざおっぱいまでワイプに表示させたんじやぞ？」

「ああ、最高だったな！ この作戦が終わつたら……『お前のおっぱいを吸わせてくれ！』とか下品すぎるだろ！ もうちょつとオブラートに包めよ！ つて、思つたわ！」

「はっはっは！ ああいうのは正直に言うのが一番なんじやよ。軽口叩いてたオペ子も顔真っ赤にしてたじやろ？ 思いはストレートに伝えるのが一番じや！」

「ふふつ、そうかもな。……それにしても神様のくせに、戦争ゲームとかよく手を出したな」

「ワシは、人が生み出した叡智の一つが銃じやと思ふんじや。武器の始まりである原始時代から、現代までその時代に合った進化を遂げてるじやろ。人を殺すための道具になつてしまつたがな……」

悲しい顔をしたじーさんに、思わず同情してしまつ

た。

「ま、最近はネットワーク通信してクソガキを相手に無双プレイをすると凄く気持ちいいから！ と、いうのも理由の一つじゃが……」

やはりこいつは神様ではないのでは？ と、心の中で自問自答を繰り返す。

「しかしな……作り出した作品を、あそこまで熱中してプレイしてくれていたのは、お前さんだけじゃったよ」

嬉しそうな笑みを浮かべたじーさんを見ると、ゲームをやり続けたかきがあつたと心の底から感じる事ができた。

「そうかい……。俺も最高に楽しかったぜ！ あのときソフィアを救えただけでも、俺は満足だよ。ありがたいな、じーさん。生まれ変わったら、できればまたじーさんのゲームがやりたいぜ」

じーさんにニッと笑いかける。じーさんも微笑み返してくれる。

だんだんと手に持っていたコントローラーに力が入

らなくなり、指先からキラキラと消失していく。

「ほっほっほ。そうかい……。それは楽しみにしてくれ。……またな」

「ああ……。また……」

男は消え去った。

後に残ったのは、コントローラーを握りしめた老人一人。

その背中は小さく、哀愁に包まれていた……。

第一話 幼少期

灰色に濁った雨雲から、冷たい雨が降り注いでいる。頬に打ちつける冷たい雨が、鈍る意識を覚束なく覚醒させる。

全身に力は入らず、体の震えが収まらない程に体温は下がりにきている。

そびえ立つ崖の上から、女性の金切り声が響いてくる。ぼやける視線の先に、銀色の髪が薄く見える。

「……ソフィア」

小さく呟き、意識を失った。

全身に走る激痛に、再び意識が覚醒した。見上げる視線の先には木でできた天井。

首を動かし辺りを見回すと、誰も使っていないベッドが並んでいる。

そして、左手に温かなぬくもりを感じる。温もりの正体は、椅子に腰掛けた銀色の髪をした女性の手だっ

た。

「……ファイ……ア……？」

少し掠れた声が静寂に包まれた部屋に響いた。喉が渴き、うまく声が出なかった。

その声に反応し、女性は顔を上げる。

「……ウエイン……？ ……ウエイン!! 起きたのね!」

視線が交差した瞬間、女性は徐ろおもむに抱きついてきた。軋む体に激痛が走る。

「……※%○●#□☆!!!!!!」

ふとまた意識がなくなり、項垂うなだれる。

「いやああああ! ウエイイン!!! 死なないでえええええ!!!」

*

再び意識が戻ると、抱きしめてきた女性は少し遠くに離されていた。

着ていた上着の留め具は外され、両手を組み合わせ小さく四角を作ったおじさんが、その窓から体を見ている。

「おや、起きたかね。意識ははっきりしているかい？」

おじさんは顔を浮かべて尋ねてきた。

「ちよつと目を見せてもらうよ。うん……大丈夫そうだね」

そう言つて留め具を戻してくれる。

「まったく……せつかく折れてる骨をくつつけたのに、それを締めあげるなんて……」

おじさんは咎めるように、笑いながら言い放つ。そ

れを聞いた女性は、顔を真っ赤にしながら俯いている。

「ま、自分のお腹を痛めて産んだ子だ。気持ちにはわからなくはないけどね……」

留め具を留め終わり、おじさんは僕の目を見て言った。

「今日はこのままゆつくりと休むんだよ」

「……あの……すいません、ここはどこですか？」

「ここは私の診療所だ。患者は君一人だね」

「そうですか、ありがとうございます。……もう一ついいですか？」

「なんだい？ 何個でもいいよ」

「なんで僕はここに寝ているんですか？」

「君は足を滑らせて、崖下に滑落してしまつたんだ。幸い大事には至らなかつたけど、もう少し遅かつたら危なかつたね」

「そうですか……すいません、あともう一つ」

「いいよ」

「あの……あそこにいる女性は……僕の母親なんですか……？」

その言葉に、笑みを浮かべていたおじさんは真顔になつてしまつた。遠くに離れている女性はシヨックを受けてしまつたのか、涙を浮かべて口を押さえている。

「き、君は、あの人が誰だか覚えてないのかね!？」

「ごめんなさい……わかりません。先ほどウエインと呼ばれていたの、それは僕の名前だと思つてますが……それ以外はなにも」

「年齢は？ 住んでいる場所は？ 好きな物は？」

「すいません……全部わかりません」

おじさんは愕然としている。後ろにいる女性は涙が溢れだして止まらなくなっている。

「大丈夫だから！ 一時的な混乱もありうるから！」

思うがままに告白してしまったが、ひどく悲しませてしまったようだ……。

落ち着かなくなってしまう、視線を泳がせると、枕元に黒い塊が置いてあった。

片手で持つにはとても重く、硬い質感のそれは手に持つ部分の先に、四角く囲われた空間の中に「ノ」みたいな形がついていた。そのさらに先にはまた取っ手がついている。細長い丸い筒には穴があいており、中からなにかが出てきそうさ。

「おじさん、これはなんですか？」

「……それは、崖下から君を救いあげた時からずっと抱えていた物だよ。ずっと手放さなかったが、君の物ではないのかい？」

（そう言われると、僕の物のような……）

再度黒い塊を眺めていると、ふと、おじーさんが笑

っているような顔がよぎった。

「なにに使う物かわからないが、君が持っていたものだ。大事にしなさい」

おじさんはそう言つて僕の頭の上に優しく手を置き、手に持っていた黒い塊を枕元に置いて、毛布をかけてくれた。

「とりあえず今日はここでゆつくり体を休めなさい。また明日経過を見よう」

おじさんはそう言い残し、立ち去っていった。

部屋に残された、女性と僕。近づいてきた女性が僕の手を取り、胸に当て握りしめる。

「ウェイン……本当に私が誰だかわからない……？」

「ごめんなさい……わかりません」

女性は涙を零しているが、気丈に笑っている。

「私はね、フィーナつていうの。あなたのお母さんよ」

無意識に呼んだ「ソフィア」とは誰だったのか……。

「そうですか……ごめんなさい。……お母……さん……

……

「大丈夫よ。気にしないで……」

頭に優しく手を乗せて撫でてくれる。

何度か頭を撫でてくれると「ちよつとごめんなさいね」と、言い席を立ち、女性はどこかへ行ってしまった。

遠くから響いてくる声押し殺した女性の泣き声は、ポツポツと落ちる雨にはかき消されず、僕の心に深く刻まれた。

第四話 少年と泥酔お母さん

ふと意識が覚醒し、目を開ける。

「——ここは？ ……ああ、そうか。一緒に寝たんだ
っけ」

お母さんの匂いが染み付いたベッドの香りですべて
を思い出す……隣には既にお母さんはいなかった。

「——あれ、もう仕事に行っちゃったのかな？」

しかし、カーテンの閉まっていない外はまだ暗く夜
を示している。

途端、むずむずとした刺激が下半身に走る。

首をあげ、確認すると、下半身の部分がもっこりと
膨らんでいる。毛布を除けると、大きく膨らんだ僕の
イチモツを、がつぶりと口に唾え込み、奉仕している
お母さんがいた。

「な、ななな!!! なにをつ」

「んふふ〜！ おいひ〜〜!!」

母親の目は虚ろに、夢を見ているかのように微笑み

ながら口をチュパッチュパッ！ と、音を出しながら
舐めたくっている。

「ぐう！ お母さん!! やめてっ!!」

「んふっ……んふふっ！」

——チュパッ……レロツ……ジュボッ！ ジュボ
ッ！

生ぬるく、ぬるぬると唾液が亀頭を舐め回し、強烈
なバキュームがイチモツを吸い上げていく。

「うう!! だめだよっ!! 出ちやうからっつ!!」

——ジュボッ！ ジュボッ！ ジュボッ！ ジュル
ルルル！

「ぐうううう!!! でるううっつ!!!」

腰が跳ね上がり、信じられない程の精液が搾り取ら
れていく。

口の中いっぱいになった精液を、喉を大きく鳴らし
ながら、お母さんは美味しそうに飲み干していく。

射精が終わると、脱力感に包まれ、ベッドに大の字
に体を放り出してしまふ。

「んふっ……美味しかった」

そう感想を漏らしたお母さんのほうからバサッと、なにかが落ちる音がした。

ベッドを這い上がってくる重みが伝わる。

一度射精したのにまだ足りないといチモツは反り返ったままだ。

竿の裏側に、陰毛の触感が当たる。

再度顔を上げ覗き込むと、全裸になったお母さんが、僕のイチモツに自分の性器を押し当て、愛液を擦りつけていた。

「んふふ、もう準備できてるわね」

「だめっ！ それはだめだよっ！ 僕は息子だよ!!」

「んふっ……ウエインのはこんなに大きくないわ。もつとかわいいーんだから……」

そう言い放ったお母さんは腰を上げ、ゆっくりと挿入してきた。

「あああああ!!! ぐううううう!!!」

「はああん……はいつてきたああっつ!」

すべてが入りきり、亀頭の先が行き止まりに触れる。動かしていないのに、亀頭の先つちよがパクパクと刺

激を受ける。

「んふっ……こんなに大きかったっけ? ……んふふ」

水音が弾ける音を大きく鳴らしながら、腰が飛び跳ねる。時折アクセントをつけるようにぬっぷぬっぷと、腰を円に動かし、膣中全体を使って刺激してくる。

既に僕の腿はガタガタと震え始め、すぐにでも射精してしまいたいそうになっている。

「んふふ、我慢しないで?」

膣中が締めつけられピクンッ! と、大きくイチモツが跳ね上がる。

「ぐあ!! 出るっ!!」

先ほど以上に激しく中出しをしてしまう。子宮口が亀頭の先につくりと吸い付き、ほとんど直接吐き出してしまった。

「はあんっ! 熱いつつ! すごい量……こんな初めて」

射精が終わると、体を倒し、上に覆いかぶさってき

「久しぶりに最高だったわ……アナタ……」
その言葉にピクツと体が動いてしまった。

「アナタ……? ……僕はウェインだよ……」
堪えきれず、震えるように声が出る。

「ずっと……見たことない父親だと思ってエッチしてたの……? そんなのっ……そんなの許さないっ!!
見たことも記憶もない父親なんて僕にはいないっ!!
父親と間違えるなんて許さないっ!! 絶対に許さないっ!!」

イチモツを引き抜き、もたれかかっていたお母さんを反転させ、今度は僕がお母さんに覆いかぶさる。

再度膣にイチモツを強引に突っ込み、猛烈に腰を振り始める。

足がカエルのように開き、見事な音を響かせながら、膣中を抉っていく。

「あんっ、ああっ、ああっつ! あふっ、あああんっ、いいっ! 素晴らしい!!」

強烈な刺激に我慢できずに射精が始まるが、それでも腰を振り続ける。

「あああ!! ビュービュー射精されながらああああ!!
——えぐられるううう!!!」

精液と愛液が入り混じ、挿入のスピードをまだまだ速める。

「おおっん! おおっん! おおっん! おおっん!
もっ……うっもうだめっ!! いぐっ! ひぐっ!!
いぐいぐいぐっううううう!!」

子宮口に亀頭を押し当て、どぶどぶと精液を吐き出す。同時にプシャッと腰に水しぶきが当たる。

「あぁ……もぅ……だめ……」

腰に当たる水の勢いも弱くなり、お母さんは意識を失ってしまった。

膣中が緩み、刺激が薄くなる。それでも心に突き刺さった痛みはまだ疼いている。目から涙が止まらない。紛らわせるかのように、ゆっくりとまた腰を動かしていく。

意識のない膣中は、精液が溢れかえり、生暖かく滑りが良いだけで射精するには至らない。何十分か腰を振り続けたが、射精はできなかった。

腰もだるくなり始め、お母さんの胸の上に頭を乗せて倒れこむ。

ふっくりと膨らんだ小さな乳頭を口に含みながら、悲しみを押し殺して眠りについた。

*

翌朝、目が覚めると私は真っ青になってしまった。

寝ているのは私のベッドだ。しかし、全裸の私の上に全裸のウエインが乗っていた。

膣中にぬるつとした感触もある。そんな……そんな

……。

寝ているウエインの両腕を掴み揺さぶる。

「ウエイン！ ウエイン起きて!!」

小さく蠢き、ウエインは顔を上げた。

その目は赤く腫れ、涙の線がくつきりと残っている。

「……お母さんおはよう」

いつもの挨拶をしてくるが、それどころではない。

「ウエ……ウエイン……昨日のこと……」

「ああ、そつか。お母さんは酔いつぶれてたからね……」

ウエインは俯き悲しそうにしている……ありのままを教えてくれた。

お酒を飲み過ぎた私を介抱し、ベッドまで送ったところで、私に捕まり動けなくなった。仕様がなないので一緒に寝ていたら、私がウエインに襲いかかったと……。

昨日のお酒が残り、響く頭痛を堪えながら冷静に判断する。

「そう……そうなのね……ウエインごめんなさい……」

……

「いいんだ。そのことは……全然いいんだ」

ウエインは許してくれたが、俯いている……まだなにかやってしまったのだろうか。

「お母さん、エッチした後……僕を間違えたんだ……」

お父さんと……」

思わずドキッとしてしまう。

旦那とはウエインが生まれる前に離婚している。理

由は「子供ができた」と、言ったら「墮ろせ」と、言ってきたからだ。

産むためには離婚するしかなかった。それ以来、必死に子育てと仕事を両立してきた。

「悔しくなつて……その後度も僕は……」

ウエインは涙を必死に流すまいと、堪えている。

「ごめん……ごめんね……ウエイン」

自分の身勝手な行動でウエインを悲しませてしまったことが許せない……。

ウエインの頭を抱きしめ、胸に抱え込む。

しかし……このあとどうしよう……。ウエインは母親を襲つてしまったことを嘆くだろう。私もそうだ……どうしたら……。

「……ウエイン……あなたお母さんのこと……まだ好き？」

「……ん？ ……大好きだよ？」

「どのくらい好き？」

「この世で一番好きだよ？」

「そう……ならいいわね！」

ウエインを抱き抱え、お風呂場へと直行する。

「わっ、なに！」

ウエインは慌てているが、気にしない。

昨夜の夕食前に入れて以来放置していたので、水風呂だったのが、勢いよく二人でドボンッ！ と入る。

「ごぼがぼ！」

暴れているが、ギョツと抱きしめる。

「間違つてしまったなら正せばいいのよ」

「ごふっ!! ……どうということ？」

「やり直すのよ！」

ウエインは頭の上に「？」を浮かべたまま動かない。ある程度一気に体の汚れを落とすと、ウエインと一緒に洗い場に出て、石鹸をゴシゴシと泡立てる。

ウエインを椅子に座らせ、待機させた。そして、十分に泡立てた石鹸をおっぱいに塗りたくる。滑りが良くなったのを確認したら、胸を両手で掴み上げ、ウエインの背中へ、べったりと押し当てる。

「わっ！ なに!?!」

「ふふっ、洗っているんだから動かないの！」

背筋をピンと伸ばしたウエインの背中を、胸で洗っていく。いかせん大きくないので、少々辛いのだが……。

乳頭がぶつくり膨れあがり、擦りあがるたびにぞわぞわつと刺激が来る。

思う存分堪能したら両手に石鹸をつけ、手のひらでウエインの体を洗っていく……ただし大きくなっているイチモツ以外。

1■歳の■■にしてはしっかりと体に筋肉が付き、胸板は薄く筋肉で覆われている。腹筋もうっすらと六つに分かれています。

（これは将来女泣かせになりそうね……私の手から離さないけどっ！）

全身を塗りたくり終わったら水を一気にかける。石鹸塗れだった体は一気に洗い流される。

「ウエインこっち向いて？」

椅子に座ったままおぼろげとこっちに向いてきたが、手を股の間に挟み、内股になっている。

「一つ洗い残しちゃったわ。しっかりと洗ってあげる」

「いいよ……ここは自分で洗うから……」

「だめよ。お母さんに任せなさい」

両手を解き放ち、内股になっている膝を強引に広げる。

そそり勃つ肉棒が、ぱおっ！と、大きく鼻を上げる。

「ふふつ、こんなに大きくなって……」

裏筋をツーッと撫で上げ、くびれに合わせて、手で輪っかを作り握る。

大きく口を開け、イチモツを放り込んだ。

「あくむっ……んぼっ……レムッ……」

舌でくびれを舐め回す。舌を回転させ、尿道口に刺激を加える。すると、口の中でイチモツが跳ね上がった。

我慢汁を吸い上げ、一度口を離す。しかし、右手で作った輪っかは動かし続ける。

「ふふつ、とつても大きい……。普段はあくんなに小さくてかわいいのに……」

何度も擦っているとピクピクと、脈打ってくる。

「そろそろ出ちゃいそう?」

「う、うん……」

「そう……じゃあ出すなら口の中でね……?」

「そう言い、大きく口を開け吸いつく。」

「ジュルルルッ」と大きく吸い上げると、一気にイチモツが大きく膨れた。

「あぐつつ!! であるっ!!!」

口の中に何度も何度も精液が飛び回る。喉に直撃して嗚咽してしまうが、我慢だ。射精が収まるのを待ち、含んだまま顔を上げる。

呆けているウェインをツンツンと突つつき、口の中に溢れる精液を見せつける。再度口を閉じて顔を上げ、喉を鳴らしながら飲み込んでいく。

ウェインは喉元をじっと見ていた。

すべてを飲み込み、再度空になった口の中を見せつける。

「ごちそうさま」

ウェインは射精したばかりなのに既にイチモツはビクビクと跳ね上がるくらい大きくなっていた。

「お母さん!」

飛びつき押し倒してくる。

ウェインの唇にそつと人差し指を当てる。

「続きはベッドの上でね?」

「そう言うとうェインは顔を真っ赤にししながら、何度もコクコクと頷いていた。」

*

お母さんの寝室は、昨日のままで汚れてしまっている。ので、僕の部屋ですることにした。

お母さんをベッドの上に座らせ、相向かいで座る。

「ウェイン……いい? 女の子とする前に一つ重要なことがあるわ。それはね……」

「そう言うとう腰を上げ、唇に「むちゅ〜!」と、キスをしてきた。」

「これよ。いい? 忘れちゃダメよ?」

再度「むちゅ〜!」と口を合わせてくる。何度も何度も舐めとるようにチュパチュパと、音を立ててお互

いの唇を吸い取る。

大きく舌を伸ばし、相手の口腔内に侵入させ、ぐねぐねと絡み合わせ唾液の交換をする。

お母さんの口の中は甘く、とても美味い。菌茎、それに菌の一本一本をにゅるにゅると舐め回し、そのままベッドに押し倒していく。

口の中から絡みついている舌を取り出し。舌を出し続け、喉、鎖骨、そして乳輪、と順番に舐め進めていく。

「あつ、んん……」

あまり大きくない丘の上に、ぶつくりと赤い色した綺麗なぼつちが存在感を表している。少し体が動くとびにふよふよつと、左右に動き、誘っているかのようだった。舌でぐりぐりと押し潰したり、周囲をぐるぐると舐め回すとピクピクツと体が動いている。口の中に含みチュパチュパと吸うと、体が浮き上がる。

甘く噛みつけると、荒く息を吐き出しながら喘ぐ^{あえ}声^{あえ}が聞こえてくる。

この赤いぼつちは僕を惹きつけてやまない。これか

らどんどん開発しよう……。

顔を下半身へと向ける。

薄い銀色の陰毛の先には、小さく閉められた小陰唇、小さくクリツと存在感を表す陰核。綺麗なピンク色をした膣があつた。

全体をパクつと咥え、舌を膣に押し当てズゾッ！と、音を立てて吸い込む。

「ひいいい!!!」

腰が激しく震え、悲鳴があがつた。

比例するように、口の中に愛液がとろとろと流れ込んできた。舌を動かし、陰核の周りをぐるぐると舐め回す。

「あああ!いいい!!!」

腰を少しだけ動かし、舌に押し当ててきた。

顔を上げ、小さな陰核に菌を当てると、ピクツと震え腰を引かれた。

腰を掴みあげ、逃がさないようにして、再度陰核を両菌で挟み、ぎりつと横にスライドする。

「ひいいいあああああ!!!」

膣中から「ピシャッ」と透明な液体が顔にかかった。ガクガクと腰が震えている。イッた衝動なのか、お母さんの目には少し涙が浮かんでいる。

(……もういいかな)

腰をベッドに下ろし、そそり勃ったイチモツを膣に当てる。「ふうふう！」と、お互い息が荒くなる。

「ウェイン……大好きよ……」

「お母さん……大好きだよ……」

膣肉をかき分け、一気に根本まで押し入れる。

「ああああああああ!!!!」

枕を両手で掴みながらお母さんは嬌声をあげた。「はあはあ」と、二人の息が整うまで、動きを止める。お互いの準備が整うと、昏が自然と合わさった。口を離さぬまま、ゆつくりと腰が前後運動を始める。

「んんふっ……うんっ……ちゅぷっ……はあ……れむっ……んふっ」

鼻から抜ける息だけを頼りに、ぐいぐいと腰を速めていく。少し荒くなった呼吸に、ついに口が離れる。

「ぐう!!! ふっ! ふっ! ふっ!!!」

「ああっ! うう! うっ! うっ!!!」

膣中が突然締めまりだす。そろそろ限界のようだ。

「出すよっ……このまま出すよっ……!!!」

「イイっ!! いいわよっ……このままっ!!!」

リズムカルに振っていた腰を最後にズバンッ! と、重く送り込み勢いよく射精していく。

「——あああ!! でてるううう!!!! ウェインの熱いのがああ!! ……中にいいいつつ!!!」

枕を両手でギュッと握りしめたまま、銀色の髪をぶんぶんと振り乱している。

すべてを奥に押し込むように、緩く腰を振り直し、射精は止まった。

「はあ……はあ……はあ……」

荒い呼吸を同じタイミングで、同じように息継ぎをして整わせている。二人で見つめ合っていると、自然と笑みがこぼれた。

「ふふっ……ふふふ……」

「ははっ……」

「とっても気持ちよかったわよ。ウェイン」



「僕も凄く気持ちよかったよ」

「んふっ……ふふふ……」

お母さんは満面の笑みで笑っている。

「いや、中にまで出されちゃったな。お母さん、困っちゃうな」

なんとも白々しい……中に出していいって言ったのはお母さんだ。

「これはもう、ウェインに責任とってもらうしかないな」

ニヤッと笑い、抱きついてくる。

「離さないわよ。ウェイン、覚悟しなさい？」

耳元で囁いてきた。

「僕が離さないよ」

優しく抱きしめる。

「……約束よ？」

小さく聞こえた。

甘い時間に終わりはない。抱き合ったまま、二人で眠りについた。

第八話 少年と発情エドナ

―深夜―

ギシツとベッドが軋み、目が覚める。

うっすらと開いた目に、ぼんやりと人影が映し出される。

僕の上に誰かが乗っかっている。

「ん……ん……??？」

すっかりと熟睡していた頭は覚醒しきつておらず、宵闇に慣れていない瞳は、その人物が誰かをはつきりとは捉えきれない。

口が柔らかいものにふさがれる。艶のある潤い豊かで柔らかい感触。

その感触を楽しむようにお互い貪り合う。

「ちゅっ、あむっ……レロツ、あふっ、ちゅぷっ……」

唾液に塗れた舌同士が絡み合い、一つになる。甘い味のある液体をいつまでも吸い続けたい。頭を起こし、相手の口腔内に舌を侵入させる。

「はあ、レムツ、ちゅむっ、レロっ……ジュルッ」

頭を起こし続けるのも辛くなり、一度口は離れた。

「はあ、はあ……」

荒い呼吸に酸素がしつかりと入ってきた。目も慣れだしてくる。

次第に見えてきたその人物は、赤い髪にウェーブがかかり、鋭い目つきは蕩けている。頬は赤く染まり、服は一切つけていなかった。巨大な胸はピンと張り出しており、真っ赤な乳首がぶつくりと膨らんでいる。

完全に発情しきっているエドナさんが、ベッドカパ―の上から全裸で僕の体を跨いでいた。

「エドナ……さん？」

声をかけてみるが、「ハアハア」と荒く息をしたまま返事をくれない。

「あの……えっと」

「ウエイン……私の権利をすべて使う……」

そう言ったエドナさんは、押し倒すように唇を合わせてきた。

一方的なキスだった。太刀打ちなんてできない。圧



倒的な程の蹂躪だった。

ぐねぐねと渦を巻き、菌茎は削られ、舌で菌は磨かれる。

腔内はエドナさんの強烈な絡みつきに陵辱されていく。

「んむっ!! はぁ! ちよっ、むー!! ——まつ、ちよっ、て!」

「ちゅむっ……はぁ、なんだ……」

「まつ……待ってください。ちよつとだけ……」

少し頭を整理させてほしい。

（なんで今エドナさんは全裸なんだ? なんで今僕を襲っているんだ? 僕はまだエドナさんに勝っていない。襲うのは僕だったんじゃないのか?）

意味不明な状況に、悶々と頭を絡ませていると、エドナさんが口を開いた。

「ウエイン……私が限界なんだ……」

荒く呼吸を繰り返したエドナさんが、理由を喋ってくれた。

「私の中で、お前を欲する気持ちが溢れて止まらない

んだ……。我慢しようとした。必死に堪えた。……でも、限界なんだ」

俯きながらもエドナさんの荒い呼吸は収まらない。

「お前が私に勝つまで我慢できない……。だから……」
「では……いいんですね? 僕も……」

「ああ、もういい。我慢ゲームは……私の負けだ」
笑った顔を見せてくれた。

その顔は初めて見たときの印象とは真逆。美人で可憐で素敵な表情だった。

跨がる隙間から足を抜き出し、エドナさんの頬までを優しく包み込み、奪うようにキスをした。

先ほどより深く深くお互いの口を啜え込む。

絡み合う舌は激しく、唾液は行ったり来たりを繰り返す。息が苦しくなるが、呼吸より舌を絡ませたい欲望が強い。

ちよつとしたタイミングで呼吸をするとき、口周り

から唾液が溢れ出してくる。

エドナさんの頭を抱えるようにキスをしている今、溢れた唾液は、喉を通り、胸元をつたいながら流れ落

ちている。

腰と頭に手を回し、先ほどまで寝ていた枕にエドナさんの頭を置く。うつすらとだが、月明かりが部屋を照らしてくれる。

横たわるエドナさんの胸は重力に負けず、乳頭は上を向いている。すらつと長い腰から下は、すべすべな肌が露わになっている。Vの字に生えている陰毛は、愛液で既に塗れべったりしている。

陰部に左手を添える。キュツと締められた両足に、しっかりと手が入らない。それでも濡れそぼっている陰毛ごとコシコシと上下に擦り、陰核目指して伸ばしていく。

「あつ……ああ!! ウェインっ!! ……あああ!!」

少しだけ腰を浮かせながら、指先に押しつけてくる。指先に陰核が触れてきた。包皮の被った陰核を爪の先で剥くように引つ掻いていく。

爪の先が少し陰核に触れるたびに「ひぐっ!!」と小さく呻き、腰が震えている。やがてすべてが露わになり、陰核は指先に押さえつけられるように撫で回され

る。

「ウェインっ!!! 強いっ!!」

枕を両手でギュツと握りしめながら、ビクビクと体を震わせている。

そのたびに胸がぶるんっ! と震え、その卑猥な動きだけで僕のイチモツは既に大きくなってしまった。

ぐりぐりと陰核を押しつけていたら、両足は既に緩みきり、すべてに手が届くようになっていた。

大きく小陰唇を撫でると、そこは既に愛液に塗れている。軽く膣口に手を当てると、パクパクと食いついてくる。中もしっかりと愛液に塗れているようだ。

指先に愛液を塗りたくり、軽く膣内に挿入させる。ツプツとした感覚があり、中は熱くキュツと締めつけてきた。緩い刺激だが「ああ……うう!!」と声にならない声をあげている。

「エドナさん……もう準備できてる?」

問いかけると真つ赤な顔をしながら頷いてくれた。我慢汁が溢れているイチモツに愛液を塗りたくる。

亀頭すべてがトロツとした液体に塗れ、膣口に添え

た。

当てるだけなのにパクパクと食いついてくる。

「あの、ちなみに……初めてだよね？」

「ああ、もちろんだ。痛みがあるんだろう？ ……耐えるさ」

とてもかっこいい台詞を仰られる。

「我慢できなかったら、ちゃんと言ってくださいね？」

小さく頷いてくれたので、少しずつ亀頭を押しつけていく。「くぶぶぶつ」と、した感触が内部をかき分けていく。

「ううう、ウエインのがっ——っつ！」

「いい？ これがエドナさんの膜だよ……今から僕がもらうね？」

「ああ、はやくしてくれ……心臓が飛び出そうだ」

少し力を入れると、ミリツと処女膜が破れる感触がある。

ゆっくりとした挿入もいいが、エドナさんなら大丈夫だろうと、一気に奥まで突き刺した。

「ぐううう！！！！ 痛いっつっつ！！ ぐっつ……

……！！！！」

枕を握りしめ、涙を零しながらエドナさんは耐えている。震える体から、凄まじい痛さが想像できた。

奥に挿れたまま動かさないようにして、エドナさんの頭と頬を撫でていく。

「少し……ッ！ このままでっ！！ 慣れるまで……このままで……」

提案を試してみたものの、エドナさんの膣内はギューと締めつけてくる。

普段の強くかっこいいエドナさんが涙を零しながら痛みを耐えているその姿はとても嗜虐心を高めてくる。

嫌われたくない。とにかく優しく……優しくしよう。真っ赤な髪を優しく梳かし、涙に濡れた頬に手を添える。

少し動いてしまうが、頬に軽くキスをして、唇にも優しくキスをした。

だんだんとエドナさんの力は抜けていき、キスしていた唇にゆっくりと口を押し上げてきた。

両手を頭に回され、「むちゅつ」とキスをする。

「ちゅっ……はぁ、はぁ……もう大丈夫だ……。動いていい」

「わかりました。ゆっくりと動かしますね……」

体を起こして、連結部を覗いてみると、処女の証の真つ赤な血がべつたりとイチモツに張り付いていた。なかなか痛そうだ……。あまり強くしないように「ずちゅっ、ずちゅっ」と緩くストロークしていく。

まだ必死に枕を握りしめているようだが、だんだんと感じてきているようで、小さい声で喘いでいる。

「エドナさん、もう少し強くするよ?」

「ああ……! もう……大丈夫だ。痛みにぴりぴりするがっ……それも慣れてきた」

ストロークの長さそのままに腰を振るスピードを少し速める。

「あつ、ああ! あんっ! イイツ!!」

エドナさんも慣れてきたようだ。さらにスピードを速める。

「あのっ、今さらっ!! なんですけどっ、避妊っ、したほうがっ、いいですよねっ?」

「あんっ!! あつ、ああ! そうっただなっ……もちろんっ、避妊したほうがいい——っ!!」

腰を振りながらの会話は難しい……一度止めよう。

「はぁ、はぁ。では、避妊の魔法があるんで使いますね?」

「あっ? はぁ、ああ……。そんなのがあるのか? それでできるなら……頼む」

なにやら腰が止まるとエドナさんはとても残念そうな顔をしているが、少しだけ待つてほしい。

自分のイチモツを少しだけ待ってエドナさんの膣中から出し、人差し指を押し当てる。

うっすらとイチモツに青い膜が張られる。瞬間、ヒヤツとしたのかエドナさんは小さく腰が跳ね上がった。

「ごめんなさい。これで大丈夫です。続けますね」

「ああ……」

またゆっくりと腰を振り始める。

だんだんとイチモツに猛烈な締めつけと温かさが伝わってくる。

血で塗れていたイチモツも既に愛液に流され、膣付

近では軽く泡立っている。

——ぱちゅっ！ ぱちゅっ！ ぱちゅっ！ ぱちゅっ！ ぱちゅっ！

一度抜いて、少し冷めたが、動かしているうちに、またイチモツに熱が籠もっていく。「キュッキュツ」と締まる膣にイチモツが絞られ、だんだんと射精が近くなる。

「エドナさんっ、そろそろっ!! ——でるっ!!!」

「ああっ!! 私もっうっ!! ——イクッッ!……!!」
ギューッ! と強く締まりイチモツから精液が飛び出した。

「うぐっ!!!」

「ああああ!!……!! イクウウウッ!……!!」

腰がビクビクと跳ね上がり、射精しながら緩く子宮口目指して腰を打ち当てていく。

エドナさんも腰が浮き上がり、ビクビクと痙攣している。イッている最中もぐねぐねと膣中は締まるのをやめない。

お母さんに続き二人目だが、お母さんとの具合はだ

いぶ違う。エドナさんは最後まで「ギューギュー」と締めつけてくる。

力尽き、大きなおっぱいを枕に上半身を倒してしま

う。
「はあ、はあ……ウエイン……気持ちよかつたぞ」

「エドナさんも最高でした」

「それにしても避妊と言いながら、中に出しているじゃないか。熱いものがそのまま出されるとは思わなかつたぞ?」

「ああ……でも、大丈夫です。すいません。すぐ抜きます」

まだ血の跡を残した膣からイチモツを取り出すと、コポツと白濁液が流れ出てきた。イチモツの先には、青い膜に包まれた白い液体がある。

「それはなんだ?」

「これに子供ができる精が詰まってる……みたいですよ?」

「なんで疑問形なんだ……?」

「すいません……。試したのはこれが初めてで……」

「なんでこんなこと知ってるんだ？」

「おじーちゃんに直接教えてもらいました」

「おじーちゃん……直接……？」

変な勘違いをしないでほしいが、ありのままを伝え
た。詳しいことはわからない。説明なんてないのだ。
こうすればこうなる。と、効果だけしか知らない。

「まあ……できたらしようがないが……うん……まあ
いい」

やっぱり信じていないようだった。

「——むう！ 少しおじーちゃんを馬鹿にされたよう
で悔しい!!」

「では、信じてもらうためにもう一つ魔法を試させて
ください！ それと、勝負しましょう。エドナさんは
イクのを堪えてください。最後までイカなかったら僕
の負け。イクたびに僕の勝ちです!!」

「む？ なんだ……？ ひどく私が不利な気がするが
……まあいい」

「では、えっと、唾液をください」

有無を言わず、口元に吸い付いた。決して飲み込

まず、舌を使ってエドナさんの口から唾液を採取し続
ける。

「あむっ……レムッ……ジュルっ……ジュルルッ……
……レムっ！」

ある程度溜まった頃、ジェスチャーで寝てもらおう。

口の中から二人の唾液を手のひらに吐き出す。

手のひらの上で青く光った唾液を、エドナさんの大
きな胸に塗りたくる。

「ひっ！ なっ……急になにをっ!! 冷たっ!!」

テカテカと輝く液を胸全体に塗りつけた。

不思議な顔をしているエドナさんに、だんだんと効
果が出てくる。

「なっ、なんだ？ 胸がぴりぴりしてっ……熱い
っ!!!」

エドナさんは光った液体を集めるように、必死に自
分の胸を揉みしだいている。

「くっ!! ああ!! 熱いっ!! ひいい!!! 乳首がっ
っ!! 熱いっっ!!」

きつく胸が変形するほど揉み潰し、液体を落とそう

としている。だが、実際に効果を發揮しているのは、染み込んだ部分なので無駄な足掻きだ。

「あつ、くつ!! ウェイン!! 私の胸につ!!! ひい!! なにをしたつ!!」

美人が自分の胸を揉みしだくその姿に、またイチモツがぐいぐいと大きくなってしまう。

「これはですね……媚薬? いや、治療? 作るのに二人の唾液が必要なんですけど……」

その光景をただただ見守る。

「くそつ!! ジンジンと熱くてつ!!! ぴりぴり感じてつ!! ——気が狂いそうになるつつ!!」

ちよつと涙目になつてきている。少しかわいそうになつてきた。

「ちよつと手伝つてあげますね?」

ピンツと張り出した乳首を口に含み「ちゅー!」と吸い上げる。

「いひいひい!!! 刺激がああああ!!! 強いいいいっ!!!」

股下からは既に愛液がビシャビシャに溢れ出し、ベ

ツドはベシヤベシヤになつている。

「んふつ! エドナさんの乳首……こりっこりで美味しい!」

「いああああ!! おかしくなるう!!! やめろおおお!!!!」

必死に熱さから解放されようと、片方の胸を自分で揉み潰しながら、もう片方は僕に吸われ続けている。

「もうそろそろかな……?」

口から手を離し、コリコリしている乳首を押し潰す。

「ぎひいひい!!! なにつ!! なにをしたつ!! 胸の中が熱いっつ!!!」

両手で乳首を握りしめる。すると……、

「ひいひい!!! あああああ!!! なんてっ!! なんて母乳がつ!! あああああ!!!」

特大になつた乳首から「ぷしゃつ! ぷしゃつ!」と音を立て、母乳が飛び出してきた。

乳首から手を離し、口に咥え、大きく胸を吸う。

「ひいああ!!! だめっつ!! 吸うんじやない!!! 吸うんじやないっつ!!!」

口の中に甘く芳醇な味わいのある生ぬるいミルクが
たくさん出てくる。

(……うーん！ 美味しい!!)

気の済むまで「ちゅーちゅー」と吸い続ける。

「ああ!! もう——気が狂うつつ!! ウェインっ!!
やめろおお!!」

顔に涙が流れている。怒らせてしまったかもしれない。

「エドナさんが魅力的すぎて、ついつい……。そろそろ解放してあげますね」

両手に乳首を掴み、全力で刺激する。

押し潰すたびに「ぶしゅっ!」と、大量のミルクが
飛び出してくる。

「ひああああ!!! やめろおおお!!! 頭がっ
つ!!!! しびれるつつ!!!」

「ふぬっ! ちなみなんですけど、これは人体に悪
影響はありません。むしろ体の疲れがとれてスッキリ
するみたいですよ?」

ギョッギョッ! と抜き続けると、やがて母乳は出

なくなつた。乳首に残つたのは最後にぺろつと舐めあ
げる。

「甘いなり! 美味しいなあ。もつと飲みたいなあ
……」

絶叫し続けていたエドナさんは失神していた。

第十四話 少年と性の宴

明日は朝から！ と聞いていたので、覚悟を決めて寝床へ入った。

自分の体温で布団が温まり、うつらうつらとし始める。日頃の疲れが溜まっていたのか……抵抗なくスッと意識は落ちた。……だが、感覚だけは尖っていたよ
うだ。

ガチャッと扉の開く音がした。

音に反応し、パツと目を覚ますと、三人の幽鬼が僕を見下ろしている。

(ひいっ!! ——日毎に増えてるっ!!)

三人の幽鬼の顔は赤く染まっている。

「ウエイン……? 土曜日になったわよ……? さあ、始めましょう……」

外はまだ真つ暗だ。

「まだ……夜……?」

「ほら、時計を見て? ——○時回ってるでしょ?

土曜日から始めるって言ったじゃない? 今すぐにここで始めたいけど……ドナは向こうで待ってるし、教官用のほうが人もいないから迷惑にならないわね。二人共、着替えを持って行きましょ。——ホラっ! ウエインも準備準備!」

エドナさんとホリーさんは既に準備万端だった。「ふー! ふー!」と荒く息をしている。

深夜の廊下は誰もいなかった。

両腕を体が熱くなっている赤髪と黒髪の美女に掴まれ、目の前には銀色の髪を靡かせ、キュッと縮まったお尻をふりふりとさせながら歩くお母さんがいる。

この異様な光景を誰かに見られたらどうなるんだろ……不安に思っていたが、誰にも会わないままドナさんが待っている部屋へ着いた。

教官用の部屋は、生徒の部屋とさほど差はない。しかし、二段ベッドではなく大きな部屋を二人で使えるようだった。さらに、私物も自由のようだ。特に羨ましいのが部屋の中にトイレとシャワー室まであることだ。寮だと共用の水場と共同トイレを使わざるを得ず、

いちいち部屋の外に出なければいけない。シャワー室があるというのもここで誘った理由みたいだ。

「では、そうね……一度に四人となんてできないから……まずは一人ずつウェインに愛してもらいましょうか。誰かにしようかしらね？　じゃんけんで決める？」

「あつ、うつ——いえ！　私たちはお義母様に先を譲らさせていただきます……」

ホリーさんとエドナさんは沈痛な面持ちで提案している。

「そうなの？　ウェインの濃厚な一番搾りを譲っちゃうの？　どろっどろに粘っこくてぷりっぷりのあつっい精子……いらなの？」

卑猥な言葉を並べ、まくし立てるように二人を攻めている。二人はモジモジと内股を擦りつけている。「いいのよ遠慮しなくて。私たちは四人全員愛してもらうんだから」

パツと顔を上げお母さんに二人はすがりついた。……洗脳ここに極まりである。

「やっぱり平等にくじ引きにしましょうか。これなら不正できないからね。今作るわね。もちろん私が最後で」

四つの棒に数字を書き、手で隠した状態で「はいっ！」と突き出している。

「やったー！　私がいっちばーん！」

結局お母さんが一番だったようだ。

「くっ！　——しかし私が二番だ！」

次はエドナさんだったらしい。

「あらー！　残念三番ー！」

ドナさんは頬に手を当ててわずかに残念そうな声をあげている。

「うぐうう！！　どんばーんー！」

ホリーさんは号泣していた。

「大丈夫よっ！　ウェインだつてばんっばんに溜まつてるんだから！　一人一発出されたら交代つてことでいいかしらね？」

同意の言葉もないまま、着ていた服を一気に解き放ち、一瞬のうちにお母さんは全裸になってしまった。

別れて一週間しか経っていないのに、少し容姿が変わっているように思える。少しだけ筋肉がついているような……。肌も若干焼けていた。とても健康そうな肌色をしている。

自分も全部脱ぎ捨てる。

順番待ちの人たちもいそいそと脱ぎだし、隣のベッドで待機している。

美女の脱衣シーンはなんて刺激的なんだろう。ついつい目で追ってしまふ。

ボタンを開けた瞬間の胸の飛び跳ね方。後ろを向いて下着を脱ぐときの淫靡さ。上着を背筋いっぱいまで伸ばして脱ぐときの、見えそうで見えない乳首。

とても刺激的だ。そして圧巻なのはドナさんの胸である。

(なんて……なんてでかいんだ！　そしてなんて柔らかそうなんだっ！　早く触りたいっ!!)

女性の裸体を眺めているだけで、イチモツは血で滾っている。

「ふふっ！　ウェインも準備万端ね！　久しぶりの息

子チ○ポ〜！」

嬉しそうに大きなベッドに仰向けに寝転び、足を抱えるように性器を露出してくる。

「はやくしないとみんなもかわいそうだしね？　私も

準備万端よ！　そのまま挿れて？」

真っ赤な性器を大きく広げ、とろとろになっている内部を見せつけてくる。

「——わ、わかった。じゃあ、このまま」

避妊魔法をかけるのを忘れない。

隣からの視線を感じながら、お母さんの膣に亀頭をあてがい、ぐぐつと力をいれて押し込める。

「——はぁあん！　久しぶりにっ！　ウェインのが!!」

挿れただけで腰がぐいっつ！　と跳ね上がり、気持ちよさそうによがっている。

こちらもエドナさんたちと散々交わり合い続けてからの禁欲生活で、イチモツはパンパンだ。ずっとセックスし続けた気分だ。

パンパンッ！　と腰を打つと、ジュップジュップ！

と愛液が混じり合う音が鳴る。

優しく包み込み、キューっつと刺激を与えてくる。凄く気持ちが良いことにとても安心する。

「——ああん！ いいっ!! 久しぶりっ！ このっ！ 気持ちよさっ!! ああん！」

「いいなり！ 私もはやくウェイン君味わってみたいなり！ エドナちゃんたちはもう知ってるんでしょ？ どんな感じなの〜？」

「ウェインのはとても遅しくて、エラでゴリゴリ膣中を削ってきますよ！ それに熱く滾った精子の量がとても多いんです。膣内射精も好きなんですけど、私の意見としたら口内射精がオススメですね！ 最初は喉に引つかかるので少し違和感を覚えますが、慣れてくるとそれもたまたまなくなり……今じゃ一日に一度胃に収めないと発作が起きます。それほど美味しいです」

「へ〜！ そうなんだ〜！ 私たちは、この胸があるからね〜！ これでいっぱい扱いて舐めとるのもいいかもね〜」

ドナさんとエドナさんは、楽しそうに自分の胸をぽ

よぼよと跳ね上げている。

（——やめてっ！ ホリーさんがまた泣いてるっつ!!）

「こちら〜！ ウェインっ！ ドナのおっぱいに夢中になってるでしよ〜！」

よそ見をしながら緩くストロークを繰り返していたら、ギュッと膣内を締めつけられながら注意されてしまった。

「すぐにドナともできるんだから、今はこっちに集中しなさいよ〜！」

ぶんぶんと怒ってしまった。……でも、ちゅつと唇に軽くキスをする、すぐに笑みをくれた。

お母さんの片足を持ち上げ、さらに奥を指すように腰を叩きつける。

「ああ！ ——これもいい!! くう!!! そろそろいいくっ! いぐっつ!! ——いぐっついぐう!!!」

ブルブルとお互いが震えた。そして、どぶどぶと大量の精子が子宮口に流れ込んでいく。

「——はあああ、うぐっ! これよお〜……たまらな

いわあ……!!」

ビクビクツと体が跳ねた後に、イチモツが突き刺さっている先端部分を、お腹の上から撫で回している。

「この余韻をずっと味わっていたいけど……次にいかなきゃね」

体を起こしたので、イチモツを抜き出すと、トロツと中から精子が流れてきている。

「は〜い! 次の人どうぞ〜!」

軽やかに隣のベッドへ戻っていった。

「よし! 次は私だつ! ——ふふつ、私も待ちわびたぞつ!!」

エドナさんは飛びかかるようにベッドへ乗ってきた。

「そうだな、私は騎乗位がいいな。ウェイン寝転がってくれ」

言われるがままに仰向けに寝転がると、イチモツは垂直に^{きり立}屹立している。

エドナさんは腰をぐりぐりとイチモツに少しだけ押し当てると、膣穴に亀頭を合わせ躊躇なく挿入してきた。

「はあああああつ!! ——いいいい!! ふううう……私
もこれが欲しかったんだ……!」

エドナさんの膣中も熱く愛液でとろとろの状態だった。

お母さんよりきつく全体を締めつけてくる。快感の高まりは先ほどより高い。

ベッドのスプリングと打ちつける腰のはずみで、「ばんっ! ばんっ! ばんっ! ばんっ!」とリズムよく挿入が続けられる。上下にぶるんぶるんと揺れているおっぱいも目にとてもいい刺激をくれる。

奥へ挿るたびに子宮口と亀頭の先端が「ちゅっ」とキスをする。

「——はっ、あつ! いいっ! これっ!! これだつ!! ——きもちっ!!! いいっ!!!」

亀頭と子宮口のキスを続けたまま、腰を円に動かす違う快感を与えてくる。

「ふっ、ふうう!!! んんっ……もう、だめだつ! 我慢できないっつ! ウェイン! 口で頼む!!」

腰を浮かし、トロトロの透명한愛液に塗れたイチモ

ツを、一気に喉奥にまでハメ込まれた。大胆に喉まで使つて奉仕してくれる。ピンピンに膨らんだ亀頭に喉奥の刺激は強すぎる。

「うつつ!!! ——ぐつつ!! エドナさんつつ!! すぐ出ますつ!!!」

大量の精液を喉奥に射精する。

喉奥にずつぽりとハマり込んでいる亀頭は、直接食道を通して胃に落とされている。

時折、喉を「ぐつぐつ」と動かされる刺激がまた気持ちがいい。

「——ンッ!——ングッ! ……ぶはあああ!! 安らぐうう……」

幸せそうに胃をさすっている。

「ありがとう……これで次回まで持ちそうだ。ドナ教官、どうぞ」

エドナさんも軽やかにベッドを降りていった。

そして待ちに待ったドナさんである。「は〜い!」と声をあげて立ち上がった瞬間、大きなおっぱいが、ぶるんつと揺れた。「ぼよんつ」ではない「ぶるんつ」

だ。

たしかに全体的に肉付きは良い。しかし太っているというわけではない。十分に許容範囲内だ。むしろこういう女性が好きという男性は多いんじゃないだろうか。

迫力のあるお胸様がだんだんと近づいてくる。

ベッドで相向かいに座るとドナさんが訪ねてきた。

「ウェイン君はどの体位でやりたい? 私はそれでいいわよ! 初めてだしね!」

「そうですか? では……座ったまま抱き合つてやりたいです」

「対面座位つてこと? それもいいわね! じゃあ失礼しま〜す!」

四つん這いで近寄ってきたドナさんは、眼前で大きな胸を揺らしたと思つたら、ズンとイチモツを膣に入れ込んできた。

膣圧は全員の中では一番刺激は弱いだろうか。だが、包み込まれて安心する心地はダントツだ。長く居座り続けられる気さえする。それでも子宮口に当たる刺激



は他の人と一緒に、ビリビリと刺激が来る。

「はぁん！ ウェイン君の大きいのね〜！ 久しぶりに気持ち〜！」

上半身を少し反らし、腰を出すようにしていたので、眼前には巨大なおっぱいがある。

（つ、ついにこれを……この手で……っ!! ……な、なんて柔らかいんだっ!!）

手を押し当てるだけで沈んでいく。ちょっと力を込めるとぐねぐねと形を変えていく。手の間からこぼれ出す肉がとてもいやらしい。

（……この重み、この柔らかさ、百点満点だッ！）

尋常じゃない執着心で両手で両胸を弄んでいく。

「あぁん！ ウェイン君はほんとにおっぱい大好きなのね〜！ でも、下のほうも刺激して〜？」

つついとおっぱいで遊んでいると、疎かにしてしまつた。ゆっくりと前後に腰を動かす。

「あんっ！ いいわね〜！ このっ！ 大きさにっ！ 長さっ!! フィーナの子は最高ね〜！」

「そうでしょう〜！ これから卒業するまで楽しめる

のよ？ 私に感謝してよね〜？」

「あぁんっ！ そうね〜！ うんっ!! これはっ！ 感謝する他っ！ ないわね〜！」

包まれる刺激にだんだんとイチモツはまた熱くなつてくる。

（手だけじゃなく……やつぱり口にも……）

ぷっくりと膨らんだ巨大な乳首を口で捉え、甘噛みする。

「ふぐっ!! あぁん！ ウェイン君てば！ 噛んじやだめよ〜！」

いつもとちよつと違う反応に、楽しくなつてしまふ。口でおっぱいを吸い込み、甘噛みを断続的にし続けながら、両手でお尻を掴み、腰を打ちつけるスピードを速める。

「あぐっ！ こら〜っつ！ だめつて！ うっ、ぐっ!! うぎっ!! 言ってるのにな〜!! うっ、くっ!!」

ドナさんの全身はどこもかしこも柔らかい。そしてとてもいい匂いがする。

腰の打ちつけをまた弱め、おっぱいからも口を離し、

両手を腰に回して谷間に顔を埋める。

「ああん！ ……ふふっ！ こういうところはまだ年齢通りなのね？ かわいいな〜！」

ドナさんからもギュッと抱きしめてくれた。甘く柔らかいドナさんの匂いに全身が包まれている気分だ。特におっぱいを両頬で感じるのが最高です。お詫びにこれまで以上に激しくしよう。

ドナさんを仰向けにベッドに寝かせ、腰を両手で抱え、強烈に打ちつける。

「あっ！！ ぐっ！！ 急っ！！ にっ！！ はげしいっ!!!」

——パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

「あぐ！ ぎっ！！ 凄っ！！ うぎっ！！ つよいっ！！！！！」

ドナさんはピンッ！ と足に力を入れ伸びきっている。

大きなおっぱいは体の揺れに対応できておらず、複雑な動きをしながら揺れている。

この光景もこの大きさ故だろうか、脳内記憶にしつ

かりと焼き付けておかねば……。

「あっ！ ああっ！！ だめっ！！ 耐えれっ！ ないっ!!! イッチャうっ!!!」

ゆったりと締めつけていた膣内も今はキューキューと強めに刺激してきている。

「中でっ！ 中で出していいからっ！！ ——このままっ!!!」

「ドナさんっ！ ——出ますっ!!!」
最後はバチーン！と大きな音が鳴り、子宮口目指して突き刺した。

ここにきて三度目の射精だが、勢いは変わらない。

どぶどぶと跳ねるように打ちつける。

手に持っているドナさんの腰も時折ブルブルと震えている。

最初は四人に増えたことに不安を抱えていたが、全員が違った気持ちよさをくれる。今はこれだけの機会に巡り合えたことに感謝してらくだ。

射精も収まり、ゆつくりと膣から半勃ちのイチモツを取り出すとゴポツという音と同時に精液が溢れてき

た。

「ふ〜！ 最高に気持ちよかったわ〜！ 次も楽しみたい〜！」

ドナさんもルンルンとした様子で隣のベッドへ戻っていった。

次はようやくホリーさんの出番……だが……。

「——ぐえ〜ん!! ウェインぐんのが勃つでないよお〜！」

全力で泣いていた。立て続けの三連続に正直、一度休みたい……。

「なんで〜！ わだじにもずぐにちようだいよお〜！」

へたれてしまっているイチモツを手に懇願している。

「あらら……まあ三連続だったしね〜！ でもホリーちゃんも我慢できないわよね〜」

お母さんも苦笑いしている。

「そうだウェイン……ちよつと耳を〜」

足を組んで見守っていたお母さんが耳打ちしてきた。

（……ふむふむ……うん……嫌いじゃない！）

「じゃあ、やってみて？」

大きく頷き、みんながいる方を向いてベッドに腰掛け、その上に号泣しているホリーさんを乗つけた。

「ホリーさん？ 足を広げてください」

「……んえ？」

困っているが強制的におっぴろげる。

「少しだけ休ませてもらう間に、ホリーさんには気持ちよくなつてもらうかなって思っています」

内腿に両手を入れ、指で性器をいじっていく。

「うひっ!! いやっ!! 見られてるっ!!」

足を閉じようとするが、手の力と足で挟み込み閉じさせない。

「もし足を閉じちゃったら、挿れてあげないですよ？」

みんなに綺麗なホリーさんのアソコ見てもらいましよう？」

ぐっ！ と力を込めていたが、脅迫によりだんだんと力が抜けていく。

「ひい!! みんなに見られてるよお!! はずかしい!!」

「ひい!!」

両手で真っ赤な顔を隠している。その光景を対面の三人はニヤニヤと見ている。

「ほらっ！ もっと広げないと見えないわよー！ もっともっとうー！」

やじの要求に全力で応える。さらに大きくホリーさんの足は開かれる。

「——いやー!! はずかしい!!!」

頭をポンポンと振っているが、足に抵抗はない。

一度触った生殖器は既に愛液で溢れていた。

抵抗のなくなった腿から手を離し、ホリーさんの生殖器をいじっていく。

「ホリーさんの生殖器は小さくて、中に入れるとキューキュー締めつけてくるんです。みんなの中で一番締めつけが強いかもしれないですね。とっても気持ちいいんです」

指を軽く膣口に押し当てて、スムーズに指を挿入する。

「見えます？ こんなに小さいのに僕のおちんちんをしつかりと啜え込むんですよ？」

他の三人に膣を開かせ見せつける。

「ホリーちゃんのアソコ綺麗〜ね〜！ 羨ましい」

「ふふっ、人の生殖器をここまでではつきりと見たのは初めてだ」

「いいな〜！ 私もキューキューと締めつけたいな〜」

三人の意見にホリーさんは羞恥の頂点に達しているようだ。体がビクビクと震えている。

そんな光景にだんだんと僕のモノにもエネルギーが溜まってきた。

「そろそろいいかな〜？ ホリーさん挿れますよ？ ……でもみんなにホリーさんのが見れなくなっちゃやうな〜……」

「はやくっ！ はやく挿れてっ!!」

顔を隠しながらホリーさんは叫んでいる。

「じゃあ遠慮なく」

そう言い僕はイチモツに滑る水を纏わせ一気に突っ込んだ。……アナルに。

「——ひぐうううう!!! そっちいい!!」

挿れただけでホリーさんの性器からプシャツと愛液が吹き飛んだ。

奥まで突き刺した状態で止まると、ホリーさんの体は痙攣している。

「ホリーさんの膣もギューギュー締めつけて大好きなんですけど、僕はホリーさんのお尻の穴も大好きなんです。このメリハリのついた刺激は病みつきです。ホリーさん挿れていいって言いましたよね？ なので大好きなこっちに挿れました。」

ゆっくりと「タンッ！ タンッ！ タンッ！ タンッ！」とお尻に打ちつける。

「あつ、ぶっ！ くるっ、しい!! うっぐっ!! けどっ!! ——イイ!!!」

歯を食いしばりながら震えている。

「ほえ〜！ 私アナル攻め初めて見たわ〜」

大きく広がり、ずっばりと僕のを咥え込んでいるホリーさんのアナルを、お母さんは興味津々とばかりに覗き込んでいる。

「そうなのですか？ 私も既にウェインに捧げてます

よ？」

「えっ！ そうなの？ 私もあげないっ!! でも最初は怖いわね……」

「私も抵抗はありましたが、時間をかけたらお腹の圧迫感が快感になりますよ。引き出すときが一番気持ちいいですね」

「へ〜！ 私もやってもらおう〜！」

「いいな〜！ 私もやりたい〜！」

(……ドナさんもかなり性に貪欲だねっ!!)

三人のエロトークを聞いているうちに、ホリーさんは気を飛ばしてしまっているようだった。

「あつ！ あつ！ ぶっ！ あつ！」

呻いている。でも意識はあるようだ。

とろとろと愛液が溢れている前もかわいそうなので、両手でほじり、クリトリスをこすりながら持ち上げる。「ひぎいいい!!!! だめっ!!! 急につ!!! なんてえええっ!!!」

ぷしゃつとした愛液が何度も何度も飛び散っている。「あつ！ あつ！ あつ！ あつ！ あつ！ もぐっ！ 我

慢っ！ できないっ!!」

腰を振っている途中に「ガクガク」と震えだし、ホリーさんは力を抜いてしまった。

お尻の刺激と指での陰核と膣への刺激で達してしまつたようだ。

僕はまだイッてない。だがホリーさんは既に力が抜けて「はあーっ！ はあーっ！」と荒く息をしている。

(どうしよう……)

「ホリーちゃん、あなただけでも一度満足できたなら、ウエインを休ませてあげない？ 起きたらまた貴方からでいいから。起きてからも時間はいっぱいあるからね？ —— どう？」

ホリーさんも小さな声で「は、はい……」と頷き、エドナさんに倒れこむように抱きついた。

「さあ、シャワーを軽く浴びて、一眠りしますか！ 起きたらまた開始よ！」

そう言つて、順番にシャワーを浴びていく。

ベッドは大きめのサイズなので、久しぶりにお母さんと一緒に寝ることになった。安らぐ匂いに包まれて

いる。

反対側ではホリーさんが巨乳と爆乳に挟まれて寝ている。僕はいいな……と思つていたが、ホリーさんは「うう……」と悲しんでいるみたいだった。

起きたらまたすぐやると言つていた。気張らねば……。

仮眠から目が覚めると、いつも起床している時間よりはだいぶ遅かった。

起きぬけの勃起しているイチモツは予定通り、ホリーさんが絞り取つた。

今回はちゃんと前の穴でしつかりと二人でイケた。

その後、久しぶりのお母さんの手料理を満喫し、遅れたが朝トレーニングへ出かけた。

今日はエドナさんの他にお母さんも参加してくれた。ドナさんとホリーさんはブランチの片付けと汚れた

ベッドの掃除をしてきている。

ランニング後の精神統一をし、いつも通りに突きの練習をしている。

「ああ、エドナちゃんがウエインにこの突きを教えてくれたのね？ 初めてこの技を見たときは驚いちゃったわよ！」

「ありがとうございます！ これは風魔法と合わせての攻撃なので、ウエインもできるかはわからなかったのですが……ウエインは風魔法の素質もあるんでしょうか？ 普通は使えないはずなのですが……」

「ウエインは優秀だからね！ できないことないわよね！ ——えっへん！」

なぜお母さんが威張るのか。……しかし嬉しそうだ。その顔が見ただけでも努力をした甲斐はあったというものだ。その後、エドナさんに許可をもらい、試しにとお母さんにやり方を教えてみたところ、一発で感覚を掴み、すべての突きに壁を感じることができるようになったと言っていた。

その後全員で組み手してみた。

さすがにエドナさんとの組み手では二人共勝負にならなかった。

お母さんとの勝負でもほとんど手も足も出なかった。

二人とのレベルが違いすぎる……。

「お義母様もなかなかにお強いですね。あんなにガードされるとは……驚きました」

「これでも教官だからね！ ちょっとくらい強くないと示しがつかないわよ。それにしてもエドナちゃんは規格外ね……。ウエインも回避のみだけど、よく見切れるわね。私なんて全然見えないわよ？ 勘と経験だけで動いてたわ」

勘と経験だけであんなに大立ち回りができたのか……それもまた凄い。

「ウエインに初めて避けられたときは本当に驚きました。そして同時に自信も砕かれましたね。……でも嬉しさもありました。ようやく競い合える人物を見つけたらと……いろいろなやりすぎましたが、ウエインと出会えて、そしてお義母様に出会えて本当に嬉しく思います」

「あらあらエドナちゃんたら嬉しいこと言うじゃない〜！ 本当ならかわいい娘つてところなんでしょうけど……一人の女性として嬉しく思うわ！ エドナちゃ

んも娘と見られるより、そっちのほうが嬉しいでしょ？」

「はいっ！ お義母様とはライバルですからね！ ウェインを愛する気持ちはお義母様といえど、負けるつもりはありません！」

「ふふっ！ そうこなくっちゃ！」

女の熱い友情が目の前で繰り広げられている。

「そういえば、話に水を差して悪いんだけど、エドナさんを洗脳させちゃったことについて話し合わない？」

「洗脳……？」

「あく……。ほら、エドナちゃんがウェインを大怪我させたときに、私がエドナちゃんに散々ウェインのこと話したでしょ？」

「ああ、あのことですか……なにか問題が……？」

「いや、ほら……なにか刷り込みのようなことをしたとお母さんも言ってたから……」

「たしかに、あの説教以降はウェインを愛おしく感じましたが……今思えばそれでよかったと思っっているし、む

しろしてもらえて感謝しているくらいだが？」

(おおう……)

「ほらね？ やっぱり問題ないでしょ！ ウェインたらエドナちゃんの心を掠め取っちゃったと思っただのよ？」

「なんだそんなこと。今が幸せであれば、それでいいじゃないか。全然後悔してないぞ？ 言っただろ、今の状況になれたことに感謝していると。そうだな……ふふっ。なら私がどれだけウェインを愛しているか体で表現しようか……」

「それいいわね！ 私もやるっ！」

「私とウェインがいつも使っているシャワー室があるのでそこでやりましょう！」

「いやっ！ それは早計よエドナちゃん。まだ甘いわね」

「なんと……？」

「ふふっ、いい？ ウェインはよく貴方のその大きなお胸に顔をつっ込んでこない？」

「ええ……胸が大好きなのは存じておりますが……」

「違うの、胸が大好きなのは周知の事実なの。ウェインはそれだけじゃないのよ！」

(乳好きは周知の事実だと……!! 全員が知っているのかっ?)

「ウェインは……ウェインはね……匂いフェチなのよ!!!」

「な、なんと……!?!」

「ね? ウェイン。あなた好きよね……女の人の香り!」

(ぬっ……ぐう……なにも言えない)

「ほらね? 胸も大好きだけど、それと同じくらいあなたの匂いも大好きなのよ。試しにほら、ウェインに谷間を押しつけてご覧なさい?」

言われるがままに、エドナさんは汗のかいた谷間を鼻いっぱい押しつけてくる。

(むぐぐぐっ!! ……すーっ……はーっ……すーっ……

……はーっ……汗をかいたエドナさんの甘酸っぱい匂い)

「見て! 一瞬で勃起したわよ?」

「ほ、ほんとだ! そんなに私の匂いが好きなのか……?」

「うぐっ……大好きです……!」

「ちなみにお母さんの匂いも大好きよね?」

「……大好きです……!」

「くっ、そんなっ! ただの巨乳好きかと思つてた……」

「ふふっ! まだまだ甘いわね。過ごしてきた時間の長さが違うのよっ!」

エドナさんは膝が折れ四つん這いになつてしまった。

「自惚うぬぼれていました……完敗です……お義母様……!」

「ふふっ、わかればよろしい。それならばもうやることはわかるわね?」

「はいっ!」

二人の獐猛な野獣が襲いかかつてきた。着ていた服は全部剥ぎ取られた。

二人共、一瞬で全裸になつている。そして自分が着ていた汗っぱいの上着を顔に押しつけられる。視界は汗でいっぱいシャツでふさがれた。濃厚なエドナ

さんの匂いでいっぱいだ。

熱り立ったイチモツを誰かの膣が包み込んでくる。

……熱い。そしてとろつとろだ。でもこれはエドナさんの膣じゃない。包み込む感じがまるで違う。

「ふふっ……エドナちゃんの匂いでいっぱいなのに、イチモツを犯してるのは私。どう？ 素敵でしょ……ウエイン？」

騎乗位で上に乗ったお母さんがゆっくりとピストンしてくる。

ぐにゅぐにゅといやらしく絡みつく刺激がパンパンに膨れたイチモツを撫で回す。

お母さんとしているはずなのにエドナさんともしてゐるような錯覚に陥ってしまう。

たまらずこちらからも腰を跳ね上げさせ上下運動を加速させる。

「ああっ！ あんっ！！ つよいつ！！ すごいわっ！！ これっ！！ いいっ！！」

跳ね上げる腰に歯止めが利かない。

「ああ！ 昨日よりっ！ 激しいっ！！ 最高よっ！！」

あんっ！ ああん！！

顔に被されている服の匂いを鼻でおもいつきり吸い込むと激しく射精をしてみました。

「——ああああ!!! 熱いつ!! ——でてるううう!!!」
腰を前後に揺らしながら射精を促してやる。射精している最中も、ずっと匂いを吸ってしまった。

「ふう、おまたせ。……エドナちゃん交代しましょ」
押しつけられていた服の力が緩むと、顔を真っ赤にしたエドナさんが今度は跨った。

「なんだ……その……そこまで喜ばれるとは……照れるな……」

どうやら必死に匂いを嗅いでいたのをずっと見ていたようだ。

「すいません……エドナさんの匂い大好きなんです……」

「全然構わないんだが……やつぱり照れる」
「ふふっ、二人で青春しているところ悪いんだけどっ！ 今度はお母さんの匂いよー！」

また顔に汗まみれのシャツを押しつけられた。

ずつと前から嗅いでいる優しく甘い匂いだ。

今回は汗をかいているので汗臭い匂いだが……この匂いも大好きだ。

匂いを味わっているとシャツ越しに口の中に舌を挿入された。

「ジュルッ……チュルッ……ぶはっ……チュルッ……」

お母さんの匂い、それに味がする。とても甘美な味、それに淫靡な匂い。

またもぐぐつとイチモツが大きくなる。それに合わせてエドナさんは膣を当て腰を落としてきた。

先ほどとは逆だ。鼻いっぱいにお母さんの匂い、そして口には甘いお母さんの味。なのにイチモツはギュッギュツといつもと違う締め方。

頭の中の思考が追いつかず、すべてが興奮へと繋がってしまふ。

「んっちゅるっ……んぶっ……ちゅるっ」

「あっ！ ぐっ！！ すごいなっ！！ これはっ！！ 初めてのっ！ 強さだっ！！」

舌も激しく絡みついてくる。シャツの汗の匂いは既に消え、口の中には甘い味がいっぱいに広がっている。(……足りないっ！！)

押さえつけているシャツを引き抜き、お母さんの頭を抱え込み、直接口腔内を食っていく。

頭の抵抗が消えたら、跳ね続けているエドナさんの腿を両手でしっかりと押さえ込み、浮いてしまう体を押さえつける。

「いい！！ ああっ！！ だめっ！ いくっ！！ いったしまうっ！！ うぐうっ！！」

大きく腰を突き上げ、熱く滾った精子を頂点に向けて解き放つ。

また大量の精で膣内を満たしてしまった。同時に膣内を食っていた舌の動きも止める。

「はあ……はあ……はあ……」
全員が荒く呼吸をしている。

「お義母様……最高でした……」

「ええ……そうね。ここまでとは……思わなかったわ」
二人も満足してくれたようだ。

「じゃ、せっかくなんでシャワーを浴びながら二ラウンドといきましょう！」

「はいっ！　そうですね！　お義母様！」

二人はシャキン！　と立ち上がった。

イチモツに刺さりっぱなしだったエドナさんの膾からは、ボタボタと精液が落ちてしまっている。

「さあ、ウエイン！　いつまで横になってるんだ！　すぐ行くぞ！」

「そうよウエイン！　はやくしないとドナたちが怒っちゃうわよ！」

寝たままの状態でズルズルとシャワー室まで運送されていった。……そのあとは美味しくただかれました。

肌がつやつやとしている二人と一緒に教員用宿舎に戻ると、ホリーさんとドナさんが待ち構えていた。

「もう！　遅いわよ！　またやってたんでしょ!!」

「二人でずるいわよ〜！　私はまだやってないのよ〜！」

やっぱりプリプリと怒っていた。

「ごめんね！　私たちは休憩ということで二人にウエインを譲るわね」

「そうですね。……そういえばお義母様に見せたいものが……」

あのあと二人は本当に仲が良くなった。まるで姉妹のようだ。

微笑ましい光景だが、二人の顔はなぜか黒い。なにをしようというのか……。

「ではドナ先生！　私たちはどこでしますか？」
「そうね〜？　ウエイン君に決めてもらう〜？」

ドナ先生は決定権をよく譲ってくれる。
「そうですね……では少しリラックスタイムなので……」

水練場はどうでしょうか……？
「水着か……」

ホリーさんはドナ先生を見ている。
「ホリーさんの引き締まった素敵な水着姿が見たいな〜」

それを聞いたホリーさんは全速力で走って行ってしまった。

「あらあら〜！ ウェイン君てばもしかして水着の私
が目的だったの〜？」

心臓が跳ねてしまう。

「えっ……うつっ？ ……ちっ………違い……ますよ……
……？」

「そうなの〜？ さつき引き締まった姿が〜って言っ
てたもんね〜？ じゃあこのままで行っちゃおうかな
〜？」

全力で地面に頭を擦りつけて土下座する。

「すいませんっ！ ドナさんの水着姿が凄く見たいで
す！ お願ひします!!」

「ふふっ！ ウェイン君てばエッチね〜！ まあ知っ
てるけど〜！ 私も用意してくるから先に着替えて待
って〜！」

一足お先に水練場に着き、即座に着替えてストレッ
チをして待つことにする。

今日は誰も水練場にはいなかった。

待つこと数分、二人の対照的な美女が更衣室から出
てきた。片や、スラっとしたスレンダーな容姿に、学

校指定の水着を着た黒髪美女。片や、白く生地少な
いビキニの水着に爆乳を押し込み、ぶるんぶるんと胸
を揺らしている青髪美女。

昨日は薄暗い部屋の中で交わっていたため、はつき
りとは見れなかったが、今はぴったりとした水着で容
姿はくつきりと見えている。

「さて〜！ 入り口には使用禁止の看板立ててきたし
〜！ 今日には自由に使えるわよ〜！」

全力の職権濫用してきたみたいだ。

「うう、ドナ先生の横に並ぶと女として完全敗北を叩
きつけられている気分だわ……」

「そんなことないわよ〜！ 私はその小さなお胸も小
さなお尻も羨ましいわよ〜？」

小さなお胸って言葉にホリーさんは大ダメージを受
けている。

「まあまあ！ 二人共魅力的ですよ！ とても水着似
合ってます！ ビバ水練！」

二人の間に入り両手で美女を抱きしめる。
片方からは豊満な柔らかい肉感が、片方からは薄め

の柔らかい肉感が……。それでもこの手に収まってくれている二人が大好きだ。

「ふふっ！ さく遊びながらエッチしましょー！」

「そうね！ せっかくなんだからいっぱいいしなきゃ！
まずはなにからします？」

「そうね。まずはエドナちゃんオススメの精飲をしたいわねー！」

「うう……ウエイン君のほんとに粘っこくて……私は
苦手です……」

「そうなの？ エドナちゃんも慣れが必要だーって
言ってたわねー！ まずは試してみないとねー」

どこでやろう？ となつたので、せっかくなのでプールの中ということになった。それでもなかなか良い場所が見つからない。

「ここは一つ私の魔法で解決しましょうかー！」

そう言ったドナ先生はプール全体に魔法を叩きつけた。すると、つま先立ちで精一杯だったプールの水が、水面から一五センチ程度の高さでしっかりと足がつく。「これなら横になっても溺れなくて済むわね。それ

でもあんまり長時間はできないから手早くしましょー！」

横になってと言われて恐る恐る寝そべると、体の半分はプールの水に浸かるが、しっかりと呼吸ができる。水の流れは感じるので妙に心地が良い。

水着をずり下ろされると、さらに開放感が加わった。「じゃあお先に私からいただいちやつてもいいかしら？」

「ええどうぞ！ 私は……そうですね。水の中で立ち
バックがいいかな」

ホリーさんはプールサイドに腰掛け、膝に腕を乗せてこちらを見ている。

「んふー！ ではいただきますーす！」

まだへたれているイチモツがふつかふかの柔らかい物体に包まれた。

視線を動かせば、やっぱりそれは爆乳だった。

エドナさんのハリのあるギュッと締めつける巨乳とは違い、柔らかさに特化したかのような爆乳は緩い刺激を与えてくれる。

それでも手で挟まれると胸の柔らかさの中に圧迫感を感じ、イチモツは反応してしまう。だんだんと大きくなり、ついには全力で勃ちあがった。

「亀頭部分だけが飛び出してるね〜！　かわい〜！」

両手で挟み込んだ爆乳から飛び出した亀頭を手でぐりぐりと押しつけてくる。ぞわぞわと体に鳥肌がたつてしまう。

「じゃあ、これを刺激すればいいんだね〜？　あ〜むっ！」

生ぬるい腔内に亀頭は飲み込まれた。そして、躊躇いもなく口撃は始まった。

初めてなのにしつかりと吸引してくるのはさすがだ。だらしなく伸びている顔がとても卑猥で、それをやらせている自分に体が震えてしまう。

「ドナさんっ！　もつと、もつと強くっ！」

さらに乳圧が加えられ、吸い込む力も上がった。

「うぐっ！！　いいですっ……このまま——出ますっ！！」

耐えきれなくなり、そのまま精液を出してしまった。

腰がブルブルと震えてしまう。

「どうでしたドナ先生。ウェイン君の精液……美味しい？」

「……ん、んま〜い！」

ドナ先生の目がキラキラと輝いている。

「喉に張りつくような苦味、食道を通るときのむせ返るような漢臭おどさ……と〜つても最高よ〜！」

ホリーさんが若干引いている。

「はあ〜これから私も精飲させてもらおう。平日の昼間とかセックスじゃ時間足りないかもしれないけど、フレラチオくらいならパパッとできるもんね〜！」

なにやら既に計画を立て始めているようだ。

「とりあえずウェイン君の味が知れただけでもよかつたわ〜。ホリーちゃんおまたせ〜！　変わるわね〜あと水深はどのくらいにしたらいいかしら？　調整するわね〜」

その後、見事にドナさんは調整してくれた。ホリーさんのスレンダーな肉体は、僕より足が長い。そして身長も高い。

それに合わせて水の中で段差を作ってくれた。これで腰の高さが合う。……でも正直悲しかった。

「じゃ、私はちよつとうがいしてくるわね」

ドナさんはどこかへ行ってしまった。

「ではホリーさん、始めますよ？」

やはり一番に攻めたいのは、控えめな乳だろう。水着のすべすべとした触感に少しだけ膨らんだ丘。手のひらに収まる丘の上には少しだけぷっくりとした突起がある。

水着の上からそれを撫で回す。やがてそれはしつかりと存在感を示してくる。

びくびくと小さく体が震えている。キュツと小さなお尻に滑らかな背中。黒く艶つやの入った髪は水を吸い、妙に艶やかだ。

スポーツ水着というのだろうか。上半身にあまり隙間がないので手の入れ用がない。本当ならこの突起したものを直接いじり回したいのだが……。

それでも体をいじくり回している間にイチモツは勃ちあがっている。用意は完了だ。

「そろそろ挿れます」

そう伝えて、手探りで性器を隠している部分の布地を横に退ける。

手触りだが上着はしつかりと水着を着込んでいるのに、性器部分だけは露出している。なんて卑猥な状況だろうか。

立った状態で少し膝を折り、ゆっくりと小さな穴に挿入していく。

相変わらずとてもきつい腔かまだ。窮屈と言ってもいいくらいだ。だが擦りだすと柔軟に広がり、強い刺激をくれる。

体のほとんどは水に浸かっている。それにホリーさんはほとんど僕に抱えられて浮いてしまっている。

あまり強くは刺激できそうにない。ゆっくりと前後運動をしていく。

「あん！ 水のっ……中も……きもちいいっ……わね」

普段よりゆっくりとしたピストン運動になってしまいが、ホリーさんはそれがお好みようだ。

いつも激しくイカせてしまっているの、これくらいがちょうどいいのだろう……たまには悪くない。

一度イチモツを引き抜き、前を向いてもらった。

立ったまま前から突っ込み、ホリーさんは僕の腰に両足を回す。

「さつきよりっ、刺激がくるわねっ！ これもいいっ!! ——ふふっ……キスしながらまったりとセックスできるなんて……」

いつもの激しいイチモツの刺激も、ここまでゆつくりだと多少我慢できる。

それでも早くホリーさんの中に出したい衝動は高い。

「そろそろイキたい？ 私もうイケそうだから……」

「じゃあ少しだけ速くしますね」

水の中でホリーさんの体を少しだけ上下に揺さぶる。

その動きに水は波を立てている。

「あっ！ ああっ！ うんっ!! いくっ!! いくわっ!!」

「ああっ！ ——出るっ!!」

水に包まれながら、ホリーさんの奥に熱い塊を撃ち出した。

やはりゆつたりセックスも、たまにはいいかもしれない。とてもリラックスしながらできた。

「ふう、ふう……。私……こういうセックス大好きかも……いいわね」

「ふふっ、そうですね。僕もそう思いました」

二人で笑い合い、結合したまま再度むちゅつと音を立ててキスをした。

「二人共々！ 準備できたよー！」

プールサイドからドナさんの声が聞こえた。

ホリーさんを抱っこしたまま立ち上がり、結合したままドナさんの所へ向かう。揺れるたびにまた刺激が走り、ピンピンに戻ってしまった。

「じゃーん！ オイルセックッ！ ウェイン君はまだ知らないかもしれないけど、水魔法は液体変換できるから、こういうこともできるよー！」

そこには以前作り出したことのあるローションやらオイルやらが桶に入っている。

「これから三人でローションプレイしようと思つて
〜！ マットの用意とローション作つてたの〜！」

その微笑まじさに、つつい苦笑いしてしまふ。

（……はっ！ これは搾乳プレイもできるのでは
っ！）

ホリーさんを下ろし、準備を手伝う。

プレイが始まると唾液の交換と称し、ドナさんから
多量の唾液を採取して媚薬を作り出した。

反省はしているが、後悔はしていない……熱い熱い
と揉みしだく姿はエドナさんと一緒だった。

その光景にイチモツが全開で跳ね上がった。しかし、
その後がひどかった。まったく母乳が収まらない。

ホリーさんにも手伝ってもらい、ようやく収まりが
ついたときには僕は全身が真っ白。ホリーさんも水着
が黒から白へ色が変わつてしまつていた。

収まつた頃にはドナさんはピクピクと痙攣しながら
失神してしまつていた。

お詫びとして後片付けは僕一人でこなした。

宿舎に帰つた後、目覚めたドナさんは「悩まされて

いたひどい肩こりがすっかり治つた！」と、喜んで
いたが弊害もあつた。

媚薬は抜けきつていゝはずなのに、母乳が出続けて
しまふようになつていた。「責任とつて〜！」と言われ、
以後パンパンに張つてしまつたら僕が搾乳することに
なつた……願つたり叶つたりだつた。

その日の最後は全員の唾液で媚薬を作り出し、全員
で母乳プレイになつた。

お母さんは久しぶりの母乳に歡喜し、エドナさんは
これで日頃の疲れがとれると言つていた。ドナさんは
そのまま母乳が出るため不要だつた。「小さい胸な
のに母乳が出る！」と、ホリーさんは喜んでいた。一
番嬉しがつていたかもしれない。

次の日の朝、濃厚なミルクの匂いで目を覚ますと、
僕だけが疲れ果てていた。他の皆は満足ということだ
日曜日は休息日に当てられた。

久しぶりに母親に甘え続け、伸び伸びと休日を通り

せた。

(明日からはローテーションが始まる。授業もセツクスも頑張らねばっ!!)

そして数日後、初めての野外演習が始まる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>